

江南・華中游記

—南京、湖南再訪の旅から—

田 中 寛

A Sketch on traveling in KONAN, KANAN District : Some Memories on the Trip of Revisiting Nanjin, Hu'nan

Hiroshi TANAKA

江南とは長江下流南側の地で江蘇、安徽省南部、浙江省北部をさす。華中とは中国の中部で行政区分としては河南、湖北、湖南、江西の四つの省をさす。平成十八年九月三日から同月十六日にかけて私が再訪した南京は江蘇、長沙は湖南の省会（省都）である。

ほぼ八十五年前の大正十三（西暦一九二二）年三月から七月にかけて芥川龍之介は毎日新聞特派員として中国を視察し、「上海游記」「江南游記」などの紀行文を著した。当時は反日、排日の狼煙が燐り続ける時代環境であつた。本小文は芥川の紀行をたどるものではない。江南、華中といつても滞在先は上記二箇所だけである。日程にしても「游記」というにはおこがましいが、ここ数年の日中関係を振り返ると、時代環境の一部、彼私の懸隔、認識は案外変わっていないのかもしれない。——そうした関心もあつて現代中国の内陸部の暮らしを見聞し、著すことにした。

第一部 南京の章

一・上海から南京へ

中国東方航空MU二七二便は定刻十二時二十分に上海国際浦東空港に到着した。九月上旬でもじつとりした暑さが皮膚を覆う。空港を出てリムジンバスの五線に乗り上海駅に向かう。運賃は十八元。隣に座ってきたのは農民風の男性だが、「便宜、便宜」（「安い、安い」）と言つて大きな手

荷物を私の膝に食い込ませる。外は小雨だった。途中、上海の高層ビルを通過し、あらためてアジア最大の商業都市センターになりつつある実感を得る。二〇一〇年の上海万博を控え、交通アクセスも大幅に向上しつつある。

上海駅南広場に到着。十三時四十分。荷物を運び出そうとするや、数人の運び屋に取り囲まれる。その最初の中年女性と交渉して十元で軟席待合室まで運んでもらう。運び屋といっても簡単な二輪車に結わいつけて目的地まで引いて行くのである。段差があれば抱えなければならぬ。こうして女性は何度も往復し日銭を稼いでいる。

芥川龍之介は「上海游記」の「第一瞥（上）」でこうした雑踏との遭遇について次のように書いた。「埠頭の外へ出たと思うと、何十人とも知れない車屋がいきなり我々を包囲した。（中略）そもそも車屋なる言葉が、日本人に与える映像は決して薄汚いものじゃない。寧ろその勢いの好い所は、何処か江戸前な心持ちを起させる位なものである。処が支那の車屋となると、不潔それ自身と云っても誇張じゃない。その上ぎつと見渡した所、どれも皆怪しげな人相をしている。……」。芥川はこの一連の紀行記を「ジャーナリストの才能の産物」と自己評価しているが、ほぼ十年前に漱石が著した「満韓ところどころ」のアジア民衆観と本質のところでは何ら変わっていない。

この入口で訪問先の東南大学の手配でY氏と落ち合うことになっている。南京までの汽車の切符を受け取るためである。目の前を両脚のない青年が膝で歩きながら、お金をめぐんでもらっている。まだ二十代であるが、これから彼はずっとこうした生活をしていく運命にあるのだろうか。さまざまな人々が行き過ぎる。通行人の携帯電話を拝借してやつとY氏と落ち合うことができた。切符は、南京の大学関係者に頼んでもらったのだが、たぶん、日本人に対する抵抗があったのか、当日当所で私の名前を書いた紙を持って立つて待つという要求は断ったそうである。Y氏を見つけるまで相当時間がかかったのはこのためであった。七十二元を渡して礼を述べ南京までの列車に乗り込む。

上海から南京までは三百余キロの距離、東京からだとも名古屋の手前、豊橋あたりであるが、所要時間は三時間少々かかる。高速バスもあるが、列車が安全かつ時間も正確である。汽車は上海と北京を結ぶ京滬線T七二六次列車で、南京からは合肥まで向かう。私の座席は対面四席の通路側（切符には「新空調軟席特快」○八車下○三四号とある）であった。軟席は日本の一等に相当、二階建て車輛の下の座席となっている。荷物の上げ下ろしに苦労した。持参した地図（「京滬線商旅指南」中華地图学社二〇〇六）を見ながら車窓に目を転じるが、さしたる光景は流れない。

前には足球の選手と思われる青年が堂々と座っていて、足球の雑誌を読み耽ったり、携帯電話を弄っている。同車輛には西洋人の旅行客が十人ほど乗り合わせていて、賑やかだった。体躯が大きいせいもあるが、どこか彼らの振舞いには奢りが感じられた。蘇州（十六時三十六分）、無錫（十七時〇二分）、常州、鎮江に停車、南京に到着したのはすでにとつぷり暮れた七時近くであった。それはかつて杭州湾に上陸した日本軍が南京への道を辿ったルートとも重なっていた。薄闇の田園の彼方に思わず目を凝らしたくなる。

南京駅には大学関係者が出迎えにきていた。駅は昨年よりきれいに整備され、ホームも車輛の乗降口と同じ高さで荷物の移動は非常に楽だった。改札を出るとすぐ地下にタクシーが並んでいる。順番に並んでいると予期しない人影が現われる。手は硬直して歪み引き攣っている。顔は二目と見られたものではない。もう片方の手は半分から先がない。右手を差し出し、並んで待っている人々から物乞いをしている。日本では久しく目にしたことのなかったハンセン病の傷を残した男性であつた。つい先刻上海で見た青年のことも思いだされたが、こちらのほうが重症で衝撃的であつた。私はまたしてもこの男性の日常的な運命の行方を思い遣つた。市内の交通緩和のため玄武湖の湖底を通る幹線道路が整備されている。そこを通つて約十五分で大学の賓館に到着。長い一日の旅程であつた。

博愛の都。これが南京の称号だ。略称は寧。車のナンバープレートは江蘇省の「蘇」と記されている。七大古都の一つとも、また北京、洛陽、西安とともに四大古都とも言われる。玄武、鼓楼、下関など十一の区、高淳など二県を含む。総人口は六百三十万。その立地的環境から経済発展もめざましく、化学工業をはじめ、鋼鉄、自動車、精密機器産業が盛んである。また高等教育機関も多く、全国でも科学技術四大基地とも称される。高等院校は二十七、研究所は五百を超える。中華門、夫子廟、中山陵、明の孝陵、漠愁湖、玄武湖など名所旧跡も多い。

南京は二度目の訪問である。昨年（二〇〇五年）夏に続いて、南京の主要大学の一つである東南大学を訪れ、外国語教育関係者、教員と面談、意見交流を行い、あわせて日本語学科の学生、院生に対して日本語学、日本語の授業を一部担当することにした。これは先方からの依頼でもあり当方からの申し出でもあつた。日中間の政治的な関係の凍結が言われて久しい中で、こうした民間、学術文化方面の交流がいかにあるべきか、実際に現場の人々と膝をつき合わせて意見、感情を交換することが何よりも必要だと感じる。昨年、今年の南京訪問は、およそ以上のような私的な経緯を背景に行われた。

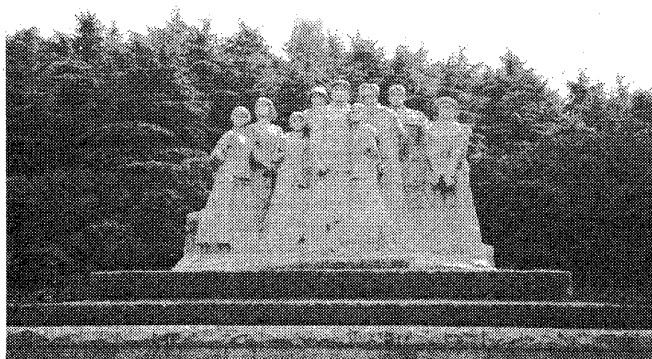
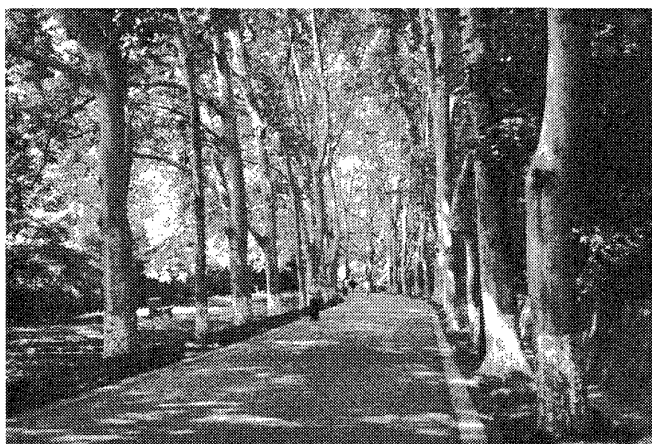
ところで、今からほぼ七十五年前に芥川龍之介は大正十三（西暦一九二二）年三月から七月にかけて毎日新聞特派員として中国を視察し、「上海游记」「江南游记」などの紀行文を著した。当時は陸に上がれば鉄道だが、海外渡航は船による方法しかなく、月日もかかった。それだけ地を這うような観察を可能にしたともいえる。漱石の「満韓ところどころ」の時代から十年後とはいえ、基本的に日本人のアジアを見る視角、視点、視野は変わっていない。だが、漱石とちがって芥川は彼自身の中国趣味を紀行文の中で巧みに綴ることに成功している。それはやはり芥川自身の中国的感性と教養に裏づけされ、かつ訪れた地域の開放感でもあろうし、出会った人物、光景との対話が可能にしたものであろう。また日本を取り巻く東アジアの時代背景として、朝鮮では三・一独立運動、中国では五四運動が勃発して時代の過渡期を強く予感させる時期であつた。確かに漱石の「満韓ところどころ」と読み比べると情景の色彩においても対照的でさえある。だが、当時のアジア認識を背景とした芥川の中国意識がそのまま現代に通じるわけではないし、また多少の欠損があつたとしてもそれは止むを得ない事情でもある。現代は現代の「中国游记」があつてし

かるべきだが、当時の文人が日本人としてどのような認識を宿していたかは、折に触れ照合させてみる必要はあろう。

南京といえば、平均的な日本人は何を思い浮べるだろうか。南京豆、南京虫、南京大虐殺、南京の基督、……。歴史的な事情に明るい人であれば、かつて国民党政府が臨時に樹立された古都。孫文に所縁のある中山陵、また世界遺産の明代の康陵があり、また玄武湖の風光、鐘山、これも世界遺産である城壁、南京博物館、……。そこにはさまざまな感情の渦がある。昨年、南京をはじめて訪れて以来、それまで疎遠であった南京が急速に私の胸中に飛び込んできた。私はこれからの残された時間、しばしば南京を訪れようと思うようになった。ここには戦後六十年以上経つてもなお、癒されることのない戦争の傷痕がある。それらを日中の将来のためにどう乗り越えていくべきか、一人ひとりが考えていく課題である。私の南京訪問がその溝を少しでも埋めていくことを願う。

二・南京市民の日本感情

南京は上海はじめ、沿海州にも近い関係から日本との経済交流は近年活発さを増し、それにとまなう日本語熟も相当な勢いである。日本車が絶え間なく行き交い、街なかのスーパーには日本製品が溢れている。だが、テレビでは日本の番組が多く放映されているわけではない。日本情報の



① 雨花台烈士陵园にて

震源はインターネットである。青少年がダウンロードして見る日本の人気番組を通して、彼らは日本の社会、文化を知ろうとする。したがって日本に関する情報は針の穴とは言わないが、我々日本人が予想するよりもはるかに限られている。我々日本側にしても往来が頻繁になったとはいえ、その情報源はマスコミその他に影響を少なからず受けており、市井の生活感情がそのまま受容されているとはとても言い難い。

南京第一の繁華街といえば新街口から近い德基広場である。昨年に開通した地下鉄から降りて地上に出ると地上五十階の高層ビルが聳え、さまざまなショッピングセンターがひしめく。日本ほどではないにしてもこの活気は経済の繁栄を直接に物語っている。擦れ違う若者は髪形も服装も日本のそれと変わらない。ストリートダンス

というのか、壁に面した滑らかな床面を陣取り、音楽に合わせてきかんにアクロバットなダンスの練習に余念がないのも、日本で見かけるような光景だ。だが、レベルはこちらのほうが高い。近くで見ていた中年夫婦が「精神病!」と言い捨てて立ち去ったのが愉快であった。

蘇州、無錫にかけて日系企業数はざっと五千数社とも言われるが、市民の関心の如何にかかわらず、日本の存在は生活を圍繞しないではおかしい。そこには想像すれば求心的、遠心的な感情の混在が認められよう。日本に対する近さと同時に歴史的な問題の介在。それがときとして不安定な状況を呈する事態が発生する。日本語を学ぶ若者もなぜ日本語を学ぶのか、といったアイデンティティの不信感に陥ることも少なくないようだ。日本語、日本事情を大学で教える教員もまた、複雑な感情を背景にし、教育の狭間で苦悩することも察せられる。日本人はそうした彼らの良心を考える機会がどれほどあるだろうか。やはり戦争の与えた傷跡は予期しない深さにまで達している。それはどれほどの時間が経とうとも色褪せることはない。少なくとも表面は平穏であるが、内面の深いところまでは知りようがない。多くの日本人が当地を訪れて、地元の人々と交流をはかる努力が続けられても、中国人の日本観の本質や奥底にあるものには直接触れられない。そこには一人ひとりの歴史があるからだ。私はただ逍遙し、自然体で南京を歩き、自分の肌で感じることである。だから、彼らの眦にいつ反日的な感情が垣間見えても私は驚かないし、失望もしない。まず、社会、生活を凝視することだ。そう思つて私は早朝、南京の庶民的な空間へ繰り出していった。

コースはふたつ。賓館を出て左と右の方向が私の早朝の散策コースだ。賓館のゲート横に自家製の饅頭や肉饅頭を売っている。美味しいとの評判で、私はそれを包んでもらい、百メートルほど右に歩いて行く。やがて丘陵が見えてくる。北極閣丘陵である。ここには「北極閣附近遇難同胞紀念碑」が屏風のように聳え、石段を登った胸の高まりを圧倒する。南京城中心部にある鼓楼広場から裏の富貴山附近にかけて殺害された二千人あまりを埋葬した、とある。南京市民はこの大地を毎朝踏みしめて一日の始まりを迎えるわけである。木々の緑がまた違った生命力で私を包み込んでくる。面白い光景を目にした。「溜鳥」、「溜鳥」などと言われる。早朝、鳥籠を提げて公園の一角に集まる。ぶら下げる位置もそれぞれ決まっている。鳥の鳴声が鳴声を呼び、競うようにして辺りに響きわたる。その活気は車の騒音を凌駕している。まだ私よりも若いと思われる退職者がこうした一日の始まりを享受している。そのことが中国の市井の時間を語りかける。ところで最近では鳥ならぬ犬を散歩がてら連れてきて同様の品評会をやるそうだ。そのうち、「溜狗」、「溜狗」といった新語も生まれるのだろうか。

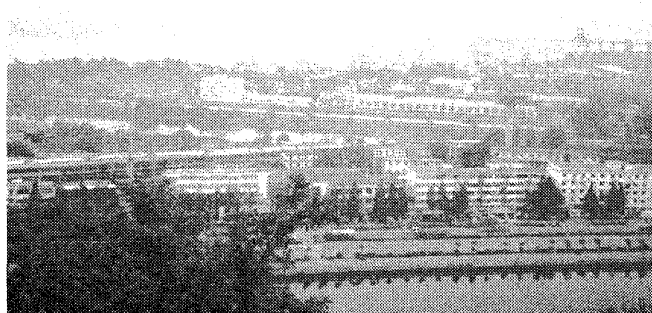
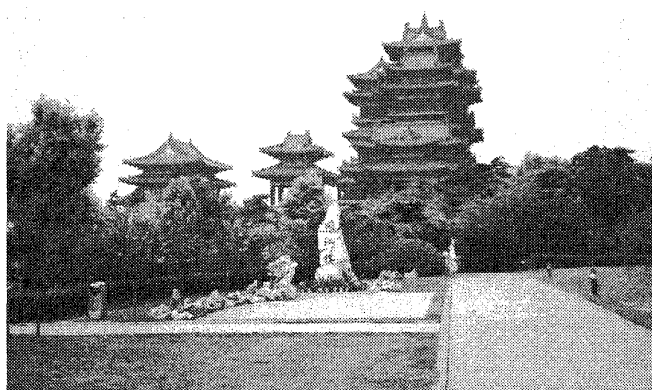
左手の方角へ歩いて行く。道路を二箇所渡ると路地があり、五十メートルほどの長さで朝市が立っている。精肉、生魚、野菜、茸といった食材は豊富である。魚肉はその場でさばき、また揚げ物などの料理にしてくれるところもある。さまざまな匂いが空腹を突くのだが、不快感はない。日用品雑貨を売る店が続く。狭い空間を利用して「焼餅」などを焼いている女もいる。一枚が五角である。道は泥濘み、自転車は通り、決して歩くのは楽ではないが、こうした光景に触れるのも民衆の体臭を知るという意味からも、私にとっては貴重な時間である。市が途切れると食堂街に

出る。そこには食欲を満たすさまざまな店が建ち並ぶ。香菜を洗っている店先に立ち止り、蒸し餃子を注文する。八つ入って三元である。少し足りないので一元の小豆粥を注文する。テーブルにまだ汚れた水が滴っている香菜が丼一杯に盛られて置かれる。南京滞在中、私は毎朝この路地を逍遊した。

三、雨花台烈士陵园と閱江楼

市内の名門大学の東南大学では日本語学と日本文学を六時間ほど講じた。その合間を縫って市内をまわることにする。昨年、訪れた中山陵や玄武湖は今回の周遊には含めない。市内の街路を同じ高さでくねくねとしたプラタナスの並木が続いているのも南京ならではの光景だ。どこに向かうでもない、生命の赴くままの生長はグロテスクでさえあるが、排気ガスの漂う空気を幾分浄化する装置でもあるようだ。ロンドン市内の広大な公園というわけにはいかぬが。何となく、緑の笠を覆い、天井を鎖した風情でもある。

孫文路には国民党時代の建築物も少なくない。大学の関係者が日本でいえば奈良を想起するように、落ち着いた鄙びた古都のイメージである。南京には名所旧跡が多い。今回は雨花台に行ってみることにした。中国でも最大規模の烈士陵园とされる。名称は聞いていたものの、実際にど



② 長江を見下ろす四大名樓の閱江樓にて（南京）

ういう場所なのか、正確には知らなかった。市南部に位置して広大な自然公園を呈しているが、一九二七年以来の国民党時代に処刑された共産党員を顕彰し、栄誉を回復するために建てられたもので、国共内戦のさまざまな歴史に至るまで陳列館では見学することができる。中国共産党初期の重要人物では搭鄧中夏、惲代英といった烈士が思い浮かぶ。だが、歴史に深い知識と教養がなければ、一般の自然公園のようにも見える。観光客はほとんどが国内の中国人で、外国人観光客は見えない。日本の戦争犯罪者もここで処刑されたと言うが、場所は特定できなかった。「思源池」の周囲北端には「国歌」、南端には「国歌」が彫られている。両側には忠魂の塑像が群立、記念碑の回廊には「新民主主義論」「共産党宣言」「馬克思主義的三個来源和三個組成部分」などの經典が記されている。売店で

求めた小冊子には三十名ほどの烈士の紹介があるものの、無学の悲しさか、ほとんど彼らに関する知識をもたない。それでもこうした革命烈士の陵園が市民の生活の中に有り、小学生や中学生らの「春遊」に訪れる場所だと聞くと、このような陵園を持たない日本との政治意識、歴史意識の差異を否応無く感じた次第であった。

公園敷地内に石を売っている店が多い。六合という郊外でとれる模様の入った石が有名な雨花石で、一個五元で観光客用に売っているのだが、中には天然のものではなく人工石も多いそうだ。水に浮べて観賞するほか、大きいものになると詩文を掘り込んで装飾観賞用の置物となる。敷地内にひととき高く聳える烈士記念碑が見える。碑高四十二、三メートル。碑の前には鎖を振りほどいた烈士の青銅塑像が直立する。正面には鄧小平の筆による「雨花台烈士記念碑」の文字が刻まれている。正門を入ったところに九人の殉難烈士像があるのと合わせて雨花台の象徴的光景である。敷き詰められた石はすべて雨花石であるが、石の中に見える赤い紋様は革命烈士の「血丹」（血痕）を象徴すると教えられるのだそうだ。私も五つほど土産に買い求める。

日本を発つ前に私は書店で「南京一九三六」（民国二十五年）という地図を入手していたが、現代の地図と比べると城壁もそうだが、道路網も地形も大きく変わっている。これも戦争の爪痕と無関係ではないのだろう。

大学関係者の案内で四大名楼の一つと言われる閩江楼に登る。ここからの揚子江の眺めは素晴らしい。東南大学の建築学科が技術の粋を集めて建造したというが、なかなか壮大な構えである。朱元璋のゆかりの土地でもあり、楼内部には明の時代の隆盛が極彩色の絵巻によって語られている。最高段まで上ると汗が滴り、運動不足の身には息切れもしてくる。だが、長江からの風に吹かれると疲労も大気の中に消えていく。

四、南京大虐殺の現場を訪ねて

虐殺の現場を訪ね歩くという作業は苛酷である。まして、戦争の実体験を直接本人の関係者から聞くとあつては、緊張を強いられる。その日（二〇〇六年九月八日）の午前、私は東南大学外国語学部教員の同行を得て、下関を訪ねることにした。実は時間が許せば全部で十七箇所の記念碑のある現場を見て回りたいという気持ちがあつたが、今回は時間がなく、閩江楼を見学した足で、近くの下関附近の現場を見ることにしたのである。

以前に大学関係者も訪れたことがあるという記憶を辿りタクシーで探し始める。何度か通行人に確かめるのだが、その都度、窓外からの不審な視線に晒される。彼らは乗客である私が日本人であることを咄嗟に察しようとする。それだけでなくいつものことだが、タクシーに乗るのは気が引ける。今回は大学関係者が同行してくれたが、運転中に戦争の話題になると、とたんに車内は空気が一変する。運転手は祖父が当時、日本軍に

虐殺されたことを語り出す。三万人ほど連行されたあと、三人が前に引きだされ、日本刀で斬首されたという。想像するに試し斬り、見せしめということだろうが、あとの連行された中国人は機関銃で全員射殺されたという。何も罪のない民衆がこんな目に遭うとは、日本人の残虐性は絶対に消えることはない。間接的に話を聞いたり本を読んだりするのではなく、こうして直に中国人から身内の人間の虐殺の経緯を聞くのはやはり尋常では耐えられない。その意味ではまことに貴重な経験である。四十代の運転手はこうも付け加えた。戦争は終わったし、友好的に付き合わなければならない。だが、日本人を見ると、どうしても感情的に残酷な記憶が甦る。重い荷物を運ぶときも手を貸してやろうとは思わない――。それが率直な思いなのだろう。

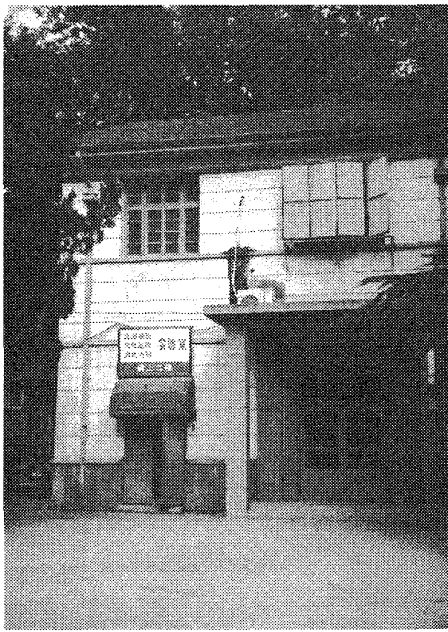
こうした体験談を聞くにつけ、戦争の被害は決して消え去らないものだとは再認識する。

下関といっても広大な範囲でかつての虐殺現場は造船所の一部だったりして直接訪ね歩くことはできない。やっと探してあてたのは「煤炭港遇難同胞記念碑」である。右手のコンクリートの塀に沿って高さ一メートル、幅三メートルほどの記念碑が立っている。その背後には泥炭な池沼が広がり、右手には細長い倉庫が見える。説明によれば敗残兵や一般市民を閉じ込めた場所と言う。一九三七年十二月十七日、日本軍は武装解除した中国軍兵士と平民三千人余りを煤炭港下流域に拘禁し、機関銃で射殺した。さらに負傷者を納屋に入れ焼き殺した、という説明がある。一帯は港湾から鉄道が引かれているが、年輩いた人たちの視線を潜るようにして訪れるのも胸を突く思いであつた。

東方綠色古都、世界文化名城。これは南京について冠せられる美辞である。あるいは博愛之都とも称される。孫逸山（孫文）は「建国方略」において「其位置及在一美善之地区。其地有高山、有深水、有平原。此三種天工、……」と述べたが、確かに首都としての要衝を備えている。その南京に芥川が着いたのは、年譜によれば大正十年五月十二日で、十六日まで滞在している。彼は当時の中国の反日的感情について多少なりとも見聞している。すでに「対華二十一箇条」を受けて、民衆は日本に対する排日の気運を高めていた。芥川は上海で三人の要人と面会している。その一人、孫文、黄興とともに辛亥革命の三鎮と言われる章炳麟と会った際に、「桃太郎」伝説の侵略説を聞いて衝撃を受ける。そのとき芥川は約十五年後の日本の中華侵略を想像しえたであろうか。

五. 細菌部隊「(栄)一六四四部隊」跡

中国東北部にかつて「満洲国」が築かれ、主として対ソ戦略の一環として関東軍の秘匿部隊「七三一部隊」が編成され、細菌工場基地がハルビン郊外の平房に作られたことは広く知られているが、その支部の一つ「(栄)一六四四部隊」が南京に存在したことはそれほど知られていない。今回の滞在中、私はその「(栄)一六四四部隊」が存在したといわれる中央病院跡を探訪に出かけた。現在、新しいビルが建設中であつたが、そ



③ 細菌部隊「榮一六四四部隊」の置かれた南京・中央医院跡地

の右手に昔風の建物があるのに気付いた。さつそく敷地内に入っていく。血液実験室などの名称が壁にペンキで書かれているほか、さまざまな医療施設が密集している。現在は解放軍の病院になっていて、市内でもっとも大きい医院の一つである。今は三階建てだが、嘗ては四階建てで、人体実験に処せられる「マルタ」が収容され、解剖実験、細菌研究が行なわれていた。今は松の木が生い茂っている。

この「〈榮〉一六四四部隊」については『細菌戦部隊』（七三二研究会、晩声社一九九六）に収められた松本博「南京でもやっていた人体実験」の証言があるほか、中国側の調査研究では張連紅氏の論文「侵華日軍南京一六四四細菌部隊与七三一部隊之関係」（『民国当案』二〇〇二）によっても知ることができる。ハルビンの「七三一部隊」と連携し、湖南常德への細菌攻撃が行われたことも知られている。「七三一部隊」の支部は北京、南京、広州のほかにもシンガポールに置かれ、細菌戦のためのネットワークが形成されていたことが知られている。数年前、病院敷地内かの土中から人骨が多数発見されたこと、それが人体実験に処されたマルタである可能性が高いことが話題になったが、具体的な検証はまだ進んでいない模様である。（後日、湖南・長沙に移動し、テレビニュースで南京の工事現場で人骨が集中的に発見された事件が報道されていたが、それも日本軍の暴行によるものとの報道だけでそれ以上の説明は新聞にも記載されていなかった）

南京師範大学の中に南京大虐殺研究センターがある。その研究主任の張連紅教授に面会したのは二〇〇六年九月七日の午後であった。あらかじめ東南大学の外事課、また人文学院の歴史系教授から連絡をしていただき、実現した。

陳教授の研究室にはちょうど早稲田大学の社会科学研究所の院生たちが南京大虐殺の被害者の聴き取り調査に来ている最中で、まだ中国側との討論会、意見交換会が行われていた。三十分ほど待つと部屋から日本人学生が十数名出てきた。討論の内容は実際のところ窺う術はないが、こうした歴史の暗渠に関心をもち続ける若い世代がいることに光明を覚えた。教授は初対面にもかかわらず、友好的に対応してくださり、細菌部隊についてはむしろ日本側の資料に頼っている状態で、新しい発見は今のところないこと、またつい先刻、訪れた中央病院に敷地内のことを確認した。

陳教授は現在必要なことは日中の若い世代がどう理解し合うか、ということ、次回、

ぜひ日本人の歴史認識について講演をしていただきたい旨の要請があった。これは私にとって身にあまる光栄であるばかりか、反対に相当なプレッシャーでもる課題なのだが、これも日中の進展を考えた場合、いささかでも力になれば、と思い、快諾することにしたのである。陳教授と記念撮影のあと、下記の四冊を寄贈された。

『難民区百日―親歴日軍大屠殺的西方人』笠原十九司著、李広徳、王志君訳二〇〇五

『陷都血涙録』郭岐著二〇〇五

『仏門避難録』鈕先銘二〇〇五

『創傷的歴史―南京大屠殺与戦時中国社会』張連紅、輕盛鴻、陳虹等著二〇〇五

『難民区百日』は日本の学術書の翻訳、『陷都血涙録』は国民党側から事件を記録したもので、南京大屠殺に関する基本文献の一つです。一九七三年に初版が出されている。『仏門避難録』は寺院に避難した民衆の実態を記録したものの、『創傷的歴史』は論文集で、全体で四つの部分からなり、それぞれの部分は「南京大屠殺的創傷記憶」「日軍性暴力与南京一六四四細菌部隊」「抗戦时期的文化与社会」「歴史与現実中的日中関係」である。この第二部分には先の張連紅氏の論文のほか、細菌戦関連として「侵華日軍在南京的秘密生化武器試驗及其戦争実施」（輕盛鴻）、「南京九華山、浦廠有関南京一六四四細菌部隊的調查報告」（劉俊虎、朱文鎮）などの論文を収めている。

いずれも南京師範大学南京大屠殺研究センター主編による南京大屠殺系列叢書のシリーズ（南京師範大学出版社）で、これからも出版計画が続いているという。

南京師範大学の歴史系、輕盛鴻教授の『南京淪陷八年史』（上下）（社会科学文献出版社二〇〇五）は南京陥落から維新政府、偽政府の施政実態を詳細に検証した労作であるが、近年、「文化大屠殺」の方面でも研究が進んでいる。文物の破壊、収奪、思想奴隸化は下巻の第七章に詳しい。新聞、文化市場、仏教、各種学校の設営など。巻末の年表によれば、大屠殺後の十二月二十四日に「日軍第十六師団在南京開始進行（良民登記）及（兵民分離工作）」とある。一九三九年一月には「維新政府（督弁南京市政公署）根据日方要求規定南京各學校一律開設日語課」とある。一九四一年二月二十四日には「日本当局名古屋東山公園舉行贈送（東來觀音）給南京的隆重儀式」とある。なお「淪陷期」における（奴化教育）の研究については、次の諸編の成果も注目されるところである。

「汪偽奴化教育政策述論」曹必宏

「汪偽統治时期的女子教育述評」周錦濤

「日偽統治下的日語教育」夏軍

いずれも『民国档案』（二〇〇五・二）に収録されている。とくに日本語教育史には関心が持たれる。

陳教授は日本人にもっと南京を訪れて欲しいこと、また若い世代と交流してほしいことを希望された。日本人にとっては傷痕をたどる旅であるが、だが、中国の民衆とこれから付き合っていくためにも、ぜひとも必要な努力である。

日本を発つ前に日中問題をNHKで放送していた。その中で日本の高名な中国学者は南京大虐殺の死者が何人あったかどうかという調査研究はあまり意味がないといった趣旨の発言をしていた。その学者は未来への対話としてそうした研究は生産性がないと言いたかったのだろう。だが、記憶は記録されなければ風化してしまう。歴史を素通りして現実面や実利面ばかりを追求した場合、新しい摩擦が起こる事態は十分予期しなければならない。

六、南京という記憶と視座

今回の南京滞在中、私は心に残る光景を体験した。東南大学と二十年以来の交流が続いている愛知工業大学の訪中団の一行の歓迎会を覗かせてもらったときのことである。日本人は大学の教授、助教授各一名、事務員一名、学生は男女二十人である。対して東南大学側は日本語科の若手教



④ 南京「煤炭港遇難同胞紀念碑」にて

員数名のほか、日本語学科の学生が二十人ほど加わって、学長主催の歓迎晩餐会のあと、それぞれの交歓会が行われた。出し物は日本語のクイズやゲームといったもので、学生それぞれ5名ずつ出てきてたとえばAで始まる英語の単語を五つ言わせるような、新入生の歓迎会で見えるようなものである。日本人学生はほとんど中国語ができないことから、内容は制限される。司会者は日本語と中国語で行われるが、日本語学科の学生の会話力は三年生を中心としてかなりの水準に達しており、コミュニケーションも問題がないように見える。だが、中国人学生が日本語で歌を歌うのに対して、日本人学生は中国の歌を歌わないし、知らない。私は中国人の男子学生が日本の現代歌謡曲をフルコーラスで実に流暢に唄うのを聴きながら、中国からの日本の距離と日本から見た中国の距離の違いを思ったもの

だった。

「火事の怨念も三代消えず」とか「百年河清」というが、まだやつと半世紀過ぎたくらいである。人間の感情はそれほど単純なものでもない。加えて加害の記憶よりも被害の記憶が幾倍にも増して強く深いことを知るべきであろう。今回も私が謝罪の言葉を口にしようとする、それを遮るように「もう過ぎたことであうから」と同情半ばに話を逸らそうとする。だが、過ぎてしまったこととして片付けてよいかといえば、決してそうではない。

日中国交回復にあたり、当時の周恩来首相は戦争を策動した一部の軍国主義者と大部分の日本人民は区別しなければならない、という「二分論」を声明し、日本政府の戦争被害の賠償を請求することをしなかった。それが昨今の日中関係にも影響を与えていることがしばしば指摘される。内面的なことでは、大部分の日本人は「戦争に関係がない」とか「被害者は私たちだった」という意識を植え付け、正しく歴史を直視する機会を逸してしまうことにもなった。いまなお、歴史認識の齟齬による日中間の懸隔が増しているのは互いの歴史を知らないことである。なかならず、日本人は中国人の戦争の時代を、中国人は戦後、そして現代の日本社会を知るべきだ、という意見がある。一方で、中国人の青少年にすれば戦争時代への関心はますます薄くなってきたといわれる。

今回はちょうど南京大虐殺記念館が補修のためか、参観できなかったことが心残りであった。昨年、私は二回そこを参観したのだが、再度感情の確認をしたかったのである。前回感じた感情が正しかったのかどうか、再度客観的に見直す必要に駆られたのである。一度だけの衝撃では現場の印象は偏ったものになるし、さらに違った角度から微調整する必要がある、というのが私の戦争遺跡、戦跡見学の持論でもある。

確かに昔の記憶に引き摺られたままでは先に進めない。かといって、すべて清算することも人間に感情がある以上、不可能なことである。吸ったり吐いたりして呼吸するようにして過去と現在の糸は結ばれている。今年は南京大虐殺を題材にした映画が少なくとも三本作られると聞いた。国際規模の撮影の準備も進められている。また、記念館は差来年の大虐殺八十周年を目的に大々的に補修中であり、ゆくゆくは江東門一帯を戦争遺跡として世界遺産に登録することを検討中であるという。こうした感情の連鎖を日本人はどう受入れていくべきであろうか。

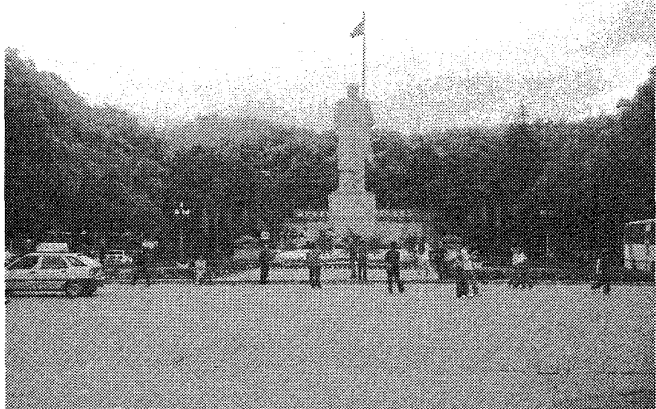
日本から帰国した南京在住の中国人は現在の中国は表面的には発展しているが、内部はまだ日本の七〇年代にあるということ、日本人は友好的である点をあげてくれた。だが、多くの中国人は現代の日本社会、日本人の感情を正確に知りえていない。ネットでも偏った情報が見られる。だからこそ、実際の触れあう交流が必要というわけである。

第二部 長沙の章

一・湖南への道

南京には都合五日間の滞在であった。実は南京から長沙へ移動するにあたって当初、夜間の高速バスを使うことを考えた。日本から大学関係者に間合わせた限りでは午後十三時ごろに出て、翌日の昼近くに着くというものであった。約一昼夜である。いかにも長過ぎはしないか。そう思いつつも一度でもあの蚕棚のような寝台の夜行バスに乗ってみたいという誘惑に駆られたのである。だが、当地でさらに確認するとやはり時間を間違えたようで午後出発して深夜の二時に着くという。これでは時間が不都合である。迎えにきてもらうのも気の毒である。汽車は上海廻りというので最初から頭になかった。高速バスは便利になったとはいえ、まだ安全上の不安を口にする人も少なくない。種々考えた結果、今後の体調も考えて飛行機を予約することにした。幸いS氏の知り合いで旅行会社の関係者がいたことから切符はスムーズに取れた。

長沙の人口は二百万少し、南京よりも小さいが、その発展ぶりは著しい。長沙は古来「楚漢名城」とも称され、三千年前から栄えていたといわれる。正式には秦の中国統一後に長沙郡が置かれたのが始まりとされる。漢の高祖の劉邦が紀元前二〇二年に長沙国をつくり、三国時代に呉の属国となった。隋唐の時代には潭州と称したが、明代に長沙の名に戻り、辛亥革命後一九三三年に長沙市が誕生した。したがって後述の芥川の訪れた時期にはまだ長沙市というものはなかった。文化遺産も多く、岳麓山の中腹に位置する漢魏最初の名利、



⑤ 東方紅広場（長湖・湖南大学にて）

湖湘第一道場の誉れ高い古麓山寺は三国時代、二六八年の創建である。宋代四大書院の一つで中国最初の書院、岳麓書院があることでも知られている。だが、長沙といえば一九七二年に発掘された馬王堆漢墓、女性（前漢長沙国宰相夫人の辛追）の遺体のほぼ完全なミイラでの発掘であった。副葬品の高度な技術、保存の良さは世界を震撼させた。四肢が完全に残っており、皮膚には弾力があり、関節も動くほどであったという。発掘は一九七四年まで続き、一号墓から三号墓まで発掘され、十万点以上の副葬品も出土した。二千百年前の前漢時代の栄華がここに甦った。一九九六年には三国時代の孫呉紀の簡牘が出土、数万片数十万字に及ぶ文字資料の発見は中国古代における五大発見の一つと称賛された。

今日の長沙の発展は眼を見張るばかりである。手元の二十二年前の地図と比較してみよう。その街並み、景観は一転した、という印象を受ける。環状線の高速も完成し、交通網の近代化はさらに産業発展を促進させた。岳麓区は工業開発区となり、かつてののどかな田園風景は跡形もなくなっている。古代都市から現代都市へ生まれ変わった。

長沙では引き続き湖南大学で日本語学、日本文学について講じるのが目的で、滞在期間は八日間である。一九八五年夏以来の訪問となる。感慨無量である。東方航空MU二七二五便が長沙の黄花飛行場に着いたのは、午後三時半、一時間二十分の所要であった。南京には名古屋、福岡への直行便があるが、長沙は現在のところ韓国ソウルとしか国際線の直行便はない。将来、大阪への乗り入れを検討中という。湖南大学外国語学院の院生二人の女学生が迎えに来てくれていた。ホンダのアコードに乗り、湖南大学へ向かう。二十二年前と比べると道路はすっかり整備され、高速道路を通って市内に着くと、まるで浦島太郎になった心境で、見るものすべてが新鮮であった。高層ビルが建ち並び、車が引つ切り無しに行き交う。二十二年前にこの発展を予想できたであろうか。

東方紅広場に着く。一九七六年に建立の毛沢東の彫像が私を迎えてくれた。背後には岳麓山がやはり霞に煙っている。

二、愛晩亭、岳麓山、岳麓書院

旅装をとくや、真つ先に私が目指したのは愛晩亭であった。当時の面影のままである。その足でさつき通ったばかりの東方紅広場に立つ。何度、ここに立つことを夢見たであろうか。毛沢東の塑像には「偉大的領袖和導師毛沢東主席永垂不朽」と記され、その背後の壁面には青年毛沢東の詠んだ「沁園春」の全文が記されている。その頭上に赤の横断幕で「牢記総書記

殷切希望弘揚孟二冬崇高精神」とある。

清末、民国初において日本へ留学した湖南人は数多い。彼らはどのようにして日本の情報を得て、日本語を予備学習し、またどのようにして日本へ渡航したのであろうか。最近、こうした清末民国初に日本留学を果たした人々の足跡を検証する研究が進められている。たとえば、遅雲飛による「陳天華、宋教仁留日史事新探」（『近代史研究』二〇〇五年第六期）には湖南出身の留学生が弘文学院をはじめ予備課程の学校でどのような日本語、専門科目の課程を学び、どのような成果を修めたのか、という報告がなされている。当時の日本語教育の私塾のような機関が確かにあったと思われるが、国民党時代、あるいは内戦による焼失などで明らかではない。劉建雲氏



愛晩亭、岳麓書院にて

の労作『中国人の日本語学習史』（学術出版会二〇〇三）には清末の東文学堂の存在が詳細に研究されているが、湖南における事情は触れていない。おそらく華中方面の東文学堂や当時隆盛をほこった湖南の隣省四川における東文学堂の流れが私塾のような学習機関を築いたことが想像されるくらいである。

湖南大学は歴史をたどればこの岳麓書院が母胎になって発展したもので、世界でもっとも古い大学の歴史をもつと言われる。岳麓書院は千年学府とも称され、宋代から著名な学者がここで講義を行ってきた。なかでも朱子学、理学の張拭、朱熹が知られている。内部には講堂、御書楼などの主要建築が残っている。今年は書院創設一〇三〇年、湖南大学改名八〇周年記念の節目である。東方紅広場の界限は昔と変わらない。だが、行き交うバスは小奇麗になり、タクシー、乗合のバイクの数も多い。何よりも道路が奇麗に補修され、学生の来ている服もカラフルで、日本の大学生とまったく変わらない。

ちょうど新人生の軍事教練が行われていた。まだあどけない年頃の学生が軍事訓練用の迷彩色の制服に身をつつみ、朝早くからほぼ一ヶ月の日程をこなす。日本でいえば新人生オリエンテーションなのだろうが、規模も意識も異なっている。だが、最近はこの訓練の苛酷な日程に異議を唱える父兄も出てきたという。また学生も訓練に耐え切れず、体調を壊したりノイローゼになったりする虚弱学生も出始めたという。学生は原則として寮生活であるが、富裕な家庭の中にはわざわざ市内に部屋を借りさせ、タクシーで通学させるケースもあるという。私の宿泊する集賢賓館にも両親と一緒に宿泊していた学生がいたが、この経済格差は驚くばかりだ。

私が暮らした当時は湘江に通じる碑門路という道路はなく、校舎を細い道が通っているだけであった。商店も少なく、夜になるとひっそりして懷中電燈なしには歩きづらい夜道であった。学生は図書館で勉強するか寮にいるかしか時間の過ごし方がなかった。

だが今はどうだろう。夜遅くまで商店は空いており、岳麓山の登山口に両側に作られた食堂も十時くらいまで賑わっている。だが、何と云っても湖大生の憩いの場所といえば、「墮落街」である。誰が名付けたか知らないが、それが学生たちの通称である。もともと便民街という名称があり、大小五十以上の食堂、カラオケ、居酒屋、美容院などが並び、学生たちの憩いの場となっている。夜も深更まで開いており、試験が終わったときなどは遅くまで賑わっている。学寮から夜食に訪れるにも格好の近さだ。私は日程的にこの「墮落街」を訪れる余裕はなかったが、今度ぜひ足を運んでみたい。だが、これ以上「墮落」しても醜態を曝け出すばかりである。

ところで目につくのは韓国人旅行者の数である。大型の観光バスを連ねて参観者があとを絶たない。大学の講堂前の駐車場はさながら観光バスの停車場である。長沙の空港がソウルと直行便を飛ばし始めたので、一気に旅行者が増えたものである。ハングルの標識も多く目につく。

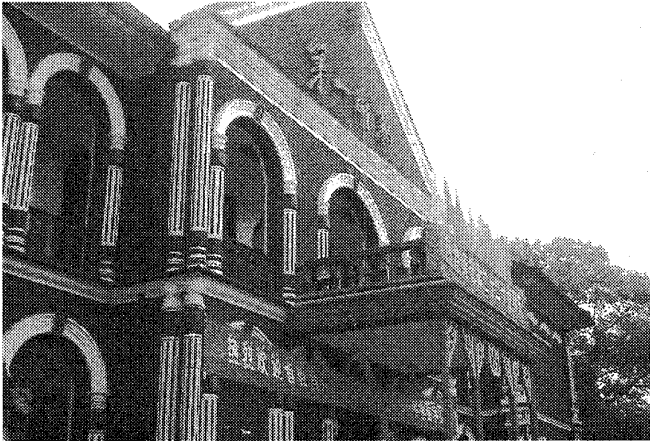
三、長沙市内の参観（一）

早朝、岳麓へ登る。滞在期間が短いので、できるだけ時間を有効に使わねばならない。

幸い、早朝だと入場料金はなく、無料で入山できるのも有り難い。劉道一、陳天華の墓をめぐったのち、最大規模の蔡鍔、黃興、焦大峰の墓をめぐると海拔二九三メートルの山頂近くである。従来の登山口は南大門だけであつたのが、営湾鎮近くの東大門からはケーブルカーが運行している。小さな谷間に「陸軍第七十三軍抗戦陣亡将士公墓」という石碑が立っている。岳麓山を戦場とした戦闘を物語る唯一の石碑であろうか。

愛晚亭へ続く広場の一角では「毛沢東与愛晚亭展」なる無料の展示室がある。青年毛沢東がここで読書に勤しんだのを思うと、あらためて八十年代の生活の息吹きを思い出す。あの当時、私は青年毛沢東を慕って湖南長沙にやってきたようなものであつた。青と赤の色調が緑に映えて美しい。全身、洗われるような靈氣を感じる。すでに登山を終えた人たちが下山してくる。凄まじいほどの鍛練である。

望江楼は新しく建てかえられてはいたが、その佇まいは昔と変わらなかつた。かつて足しげく通つた専家食堂は「湖大印象芸術餐厅」「松林齋山莊」という洒落たレストランになっている。夜更けにここで酒を飲み交わすのも一興である。焦げ茶を基調とした壁と薨が眼下に広がり、岳麓書院の境内は一幅の絵画のようである。



長沙参観 湖南第一師範、天心閣、清水堆

その日は大学院生の案内で一日、市内見学を行った。まず、長沙の変貌を知るためである。書店で地図を買ったが、地名、道路名など大きく変わっている。一九八一年当時の長沙の地図には湘江大橋しかかかっていなかった（『古城長沙』湖南美術出版社一九八三）。

手元にある『湖南省地図冊』（中国地図出版社

二〇〇一）では北に位置する順から湘江四橋、湘江二橋、湘江一橋、湘江三橋、湘江五橋と、竣工順に名付けられている。それが最新版の「長沙交通新図」によればさらに北側に二箇所の橋が建造され、その結果、北から順番に「湘江月亮島大橋」「湘江三漢硯大橋」「銀盆鈴大橋」「橘子洲大橋」「湘江猴子石大橋」「湘江黒石鋪大橋」の六つに増えているのだ。このうち、「湘江月亮島大橋」と「湘江黒石鋪大橋」は外環状（三環）が走り、「湘江三漢硯大橋」と「湘江猴子石大橋」は内環状（二環）が走っている。特に目を見張るのは八十年代までほとんど農地であった岳麓区が新工業団地として開発区に指定され、新しい工業都市の様相を呈してきたのである。その中継地である營湾鎮も東城商場ショッピングセンターをはじめ、さまざまな商店が軒を競い、活況を呈している。よく長沙は変わったと聞いてはいたが、想像をはるかに越えるものだった。これほどの変貌は私はこれまで体験したことがなかった。私は過去の心象へと同時に当時から予想もしなかった未来現実に同時タイムスリップしたことになるのだが、何とも複雑な気分であった。

まず向かったのが開福寺である。ここはかつて滞在したときは訪れなかった。たぶん、敷地内も整備されていなかったと思われる。仏教禪宗の中でも臨済宗楊岐派の有名な寺院で、早くは五代十国の時代に建立されたとされる。正式な開山は唐の明宗の時代、天成二年（西暦九二七年）という歴史を有している。その後数次にわたって焼失し、光緒十七年（西暦一八九一年）にほぼ現在の敷地を整備したとされる。本堂には五百羅漢像があり、氣にいった仏像に自分の年齢を足していった番号の仏像にご利益があるという占いがある。

ついで訪れたのが湖南省博物館である。市内東風路に位置し、非常に立派な展示館になっていて、この湖南省の文物的史料価値を象徴している。基本展示としては「馬王堆漢墓」「湖南商周青銅器」「湖南名窯陶器」「館藏明清書法」「湖南十大考古新發現」の五大展示が知られている。世界を震撼させた馬王堆のミイラが発見されたのは一九七二年八月二日のことであった。そのミイラに再度対面である。それにしても当時の衣裳や植物、食物、食器、武器など真新しいままで残っていることに改めて驚嘆する。なかには複製なのかどうか見分けがつかないくらいである。

ちやうどこの時期、『走向盛唐』国宝大展が行われていた。三百もの展示品は国内一四の省、市、自治区から寄せられた国宝文物であり、めつたに見ることのない機会である。たとえば「彩絵泥塑騎馬女俑」（唐六一八—九〇七）「緑袖陶樓」（東漢二五—二二〇）「蝶金彩絵如来仏立像」（北周五五七—五八一）などである。

天心閣公園は建湘路と蔡鍔路に挟まれるようにして位置している。太平天国の乱時期にここは主戦場となった。この古城はもともと土城であったが、一三七二年に石造になったと記されている。一八五二年には太平天国軍が侵攻、大きな破壊を受けた。ここでは長沙大火の再現のビデオを上映していた。湖南のとりわけ長沙人民に深く根付いているのが「長沙大火」である。これは「文夕大火」とも言われる。この史実については近年、詳細な研究書が出版されている。梁小進、陳先枢著『一九三八—（十一・十三）長沙大火』（湖北人民出版社二〇〇六）である。当書には戦時

繁営の長沙が再現され、その後日中戦争によって巨大な損害を蒙った惨状が多くの写真、証言で記されている。この大火によって長沙はほぼ壊滅し、歴史的文物は灰塵に帰した。長沙は第二次世界大戦中の世界でも最も甚大な被害を受けた都市である。湖南を語る時、常德の細菌戦、衡陽の戦役とともに長沙大火は忘れてはならない歴史的記憶である。現在の建物は一九八三年に再建されたものである。

公園の一角で飴を売っている男がいる。これは一見に価値した。まず注文したい客は一元を払って傍らのルーレットのような円盤を廻すのである。十二支ではないが、時計の時刻の位置に動物の絵がかいてある。そこに針が止まったら、その絵をかたどってくれるというものだ。熱した陶器の丸い卓上にこれも熱した飴を長細い匙で掬って見る見るうちに出来上がる。大きいのに当たる場合もある。だが、なかなかうまく針は止まってくれない。だから三元を払って大きな動物飴を注文する客もいる。それにしても一元、二元で商売が成り立つのだろうか。暫く見ていると、西洋人を連れた若い中国人女性が立ち寄った。比較的流暢な英語で女性が説明している。何度か試してその髻面の西洋男性は結局三本もの水飴を買ってしまうことになる。湖南の人は器用だ。岳麓に行く途中でもいい。街中でもいい。男達が竹細工や針金細工をしたり、人物の切り絵をしたり、なかなか見ていて飽きさせない。商売のほうは分からないが、悠々と楽しんでやっている感じである。

天心閣公園から歩いていくとちょうど浅草のような下町が広がり、群衆が奔っている。するとどこからともなく、いい香りがしてくる。「臭豆腐」である。至る所に豆腐を揚げ、小皿にいれて売っている。二元で六切れほど入っている、酒のつまみには絶品だが、これだけ食べてもけつこう腹の足しになり、美味である。火宮殿では湖南料理を満喫、ここも八十年代当時と比べると隔世の感である。車を横付けにして飲食に来る市民も多く、道路の渋滞は相当なものである。食事の後で、長沙でもっとも「先端的」な繁華街を歩いた。黄興路の端には革命家黄興の堂々とした立像が屹立している。

四・南岳・衡山へ

今日も学生が同行してくれることになった。学生は自分の日本語がどれだけ通じるか、大変緊張している。張教授が私のことを紹介するや、中国語が解せることがわかり、やっと安心した様子。マイクロバスにはすでに旅行社が手配した参加者が乗り合わせ、私たち二人は最後の乗客だったが、席が離れているため、一人が前方に移動し、後方の席を二つ空けてくれた。普通なら、移動してあげないところだ。私が外国人だと知って友好的に対応していただいたことに恐縮した。これが中国人同士ならばまず無理



南岳衡山にて

なところである。

南岳・衡山へは湘潭市を通過して、バスで三時間の行程である。その中心は衡陽。かつての日本陸軍が最大の兵力三十六万を投入した湘桂作戦のなかでも最激戦地であった。戦死者、戦病死者は十万をくだらない。日本語では「作戦」「大戦」というがそこには勝利か敗戦か明示されない。中国語では勝利は「大捷」(dà jié)と言うが、大敗もまた同じ発音で「大劫」(dà jié)と言う。この混乱を避けるため、未曾有の災難、大惨禍を「浩劫」(hào jié)と言うことがある。この湖南の戦場については『中国慰霊』(新聞記者が語りつぐ戦争、讀賣新聞大阪社会部、角川文庫一九八五)などに詳しい。南岳衡山牌坊を起点として、南岳大廟、麻姑仙境などを見ながら、上昇を続ける。荒っぽい運転である。日光のいろは坂を時速五十キロぐらいで走行する状態を想像されたい。しかも道路は狭く、下山する車輛ともひっきりなしに擦れ違う。おまけにガードレールもない。ひとつ運転を誤れば大事故は免れないが、運転手はいたって強気でハンドルをさばくのである。全身にGがかかり、学生は嘔吐の連続で悲惨なものだった。

実はこの衡山詣では苦い旅だった。衡山は火の山、火の信仰である。「五岳独秀」、「中華寿岳」とも称される。国家四A級の観光地で、年間三百万の観光客が訪れるという。頂上の祝融峰の標高は一二九〇米。決して高山ではないが、俗に七十二峰を数える山容は山岳仏教の聖地にふさわしく霧が立ち込める。そこで私は無病息災を祈るべく家族の名前を記した線香を求めたのであるが、これが四百元近くするというのだ。中国人はもつともらしく説明するが、乗せられたと思つたらもう遅い。多くの中国人に取り囲まれるようにして日本人を責めたてる。外国人、就中、日本人なら当然支払うべきだ、という剣幕にまで激化する。さんざん値切つて半額にしたのだが、それでも高過ぎる。だが、ここは神聖な詣でもあるし、諍いは起こしたくない。決着をつけることにしたのだが、私はむしろその場にいた中国人学生の境遇を思い遣つた。彼は一度も私の側に立つこともなく、黙つて成り行きを見るほかなかったのである。正義魂を見せて「外国人値段」を糾弾してもよかったが、多勢に無勢だった。私はそのとき、もし学生が私の側に立つたとして、それは小さな「漢奸」となつたであろうか。そう心を痛めたのである。

午後、下山の途中、忠烈祠に立ち寄つた。一九四三年に建立されたもので、中国で唯一の抗日陣亡将士の陵園で、南京の中山陵を模して作られたものである。このほか、中華万寿大鼎、南岳大廟などを見学、七時近くに長沙に戻つた。

五. 湖南人の氣質

よく聞いた話がある。中国で一番車の運転が荒いのは湖南長沙であるらしい。確かに南京と比較したのではその印象を強くした。もともとこうした気性の背景には革命家を輩出した伝統的でありかつ革新的な進取の氣質があつてのことだが、氣候風土がこれに化成していることはしばしば首肯されるところである。内陸部にあつて夏は高温多湿、冬はどうかすると東北部よりも厳しい寒さである。今でも大学ではクーラーも暖房も入っ

ていなので、とくに冬の季節になるとオーバーを着込んで、手袋をしての授業になる。激しい天候の変化も特徴である。こうした環境から体調を崩しがちでもあるが、湖南人は唐辛子をよく食用する。料理もおしなべて辛い。

そもそも私が湖南という風土に関心をもったのは青年毛沢東の思想形成においてであった。いま、改めて李銳著『毛沢東その青年時代』（玉川信明、松井博光訳、至誠堂一九六六）を読み返し、軍閥政府に抗した労働運動のあけぼのに想いを馳せる。そこにはまた独創と鍛練を基調とする書院の伝統も大きかった。新民学会などの思想的基盤もそこにあったと見る。清末民国初における日本留学生の割合は全体の二割を占めていたし、「勤工儉学」運動、五四運動も盛んであった湖南はとにかく先覚的性格の強い風土であった。私は湖南に暮らしていたとき、ある学者が湖南はひとつの国である、と誇り高く語った意気軒昂を忘れることができない。これは日本人の思想、感情の幅とは比較しようもない。

芥川龍之介は『湖南の扇』で湖南人の気質について革命家の名前を挙げながら説明している。湖南文化は湖湘文化とも総称されるが、そこには中央に対する独自の文化歴史伝統に対する矜持のようなものが厳存している。また、これは長沙人についてよく言われることだが、「逍遙」を好む。時間を気にせず、悠々自適に生きるといった生き方が市民感情の中にも貫流している。

近年、『湖湘文化縦横談』（王興国主編、湖南大学出版社、一九九六）などのように、湖湘文化の近代化、近代思想哲学に及ぼした足跡の研究がさかんである。「湖湘文化と章士釗」、「湖湘文化の毛沢東に与えた影響」などである。愛国主義の伝統は屈原に始まるわけで、洋務派、維新派、革命派の系譜は確かにとうとうと流れる湘江のごとくである。だが、そうした思想学問の系譜と湖南人の気質がどう形成されていたかはまた別の次元であるのかもしれない。あらためて中国の地勢的、思想的風土の奥行きに茫漠たる想いなり。

六、長沙市内の参観（二）

まず宿舎から湘江に出て、河にそって歩く。かつて二十年前もよく歩いた。もつとも以前はこれほど道路は整備されていなかった。

湖南第一師範へは湘江大橋、もとい橘子州大橋を渡り、河岸に沿って歩くこと二十分、労働路に入って右折すれば左手に見えてくる。この河岸の散策もまた新しい長沙の名所の一つとなっている。対岸の橘子州頭の砂州は今立ち入り禁止である。香港資本が入り、数カ月後には立派なリゾート地が誕生するという。いま、その遊歩道を建設中であるが見えるが、あまりにも開発されて昔の長沙のイメージがなくなってしまうという懸念、反対も市民や学者の中にはあるそうだ。歩いて行くとさまざまな洒落た茶館があり、杜甫楼と呼ばれる三層の見晴台がある。また、馬頭には観光船が客引きに余念がない。

一九一三年春から一九一八年夏まで毛沢東はこの湖南第一師範で学んだ。記念館は真新しく補修された建物の左手奥にあり、革命の軌跡が展示

されている。この建物も「文夕大火」で焼失したが、一九六八年にほぼ修復された。

市内に美味しい湧き水があると聞いて駆けつけた。白沙公園の横に白沙古井と呼ばれる古井戸があり、そこへ市民が湧き水を汲みに来ている。喉が渴いていた私は柄杓を借りてその生水を一リットル近く飲んだだろうか。甘くてつい喉を通ってしまった。だが、その夜から二日間、強烈な下痢に襲われたのは言うまでも無い。やはり生水は大敵である。

長沙市博物館の中に清水塘という革命史跡がある。むしろ中国共産党湘区委員会旧跡、毛沢東楊開慧故居の名称のほうが知られているかもしれない。なお、長沙の歴史、社会についてもガイドとしては次のものが最新で詳しい。写真もカラーが豊富でローカルな情報も満載。

高雲、張潤生主編『独歩中国長沙湘西』中国旅遊出版社 2006.3

範寧著『長沙這個「鬼」地方』湖南人民出版社 2006.8

夜、大学の関係者とともに夜のドライブに出かけたが、その夜景の賑やかさは強い印象となって刻まれた。

七. 芥川龍之介の見た長沙



変貌著しい橘子州頭

芥川は一九二二年六月三〇日から七月一日にかけて長沙に三日間滞在している。その間の彼の体験は「支那遊記」に見出すことはできない。一九二六年に書いた『湖南の扇』によるしかない。彼は長沙の印象を次のように書き遺している。

高曇天の山の前に白壁や瓦屋根を積み上げた長沙は予想以上に見すばらかった。殊に狭苦しい埠頭のあたりは新しい赤煉瓦の西洋家屋や葉柳なども見えるだけに殆ど飯田河岸と変わらなかった。僕は当時長江に沿うた大抵の都会に幻滅していたから、長沙にも勿論豚の外に見るものがないことを覚悟していた。しかしこう言う見すばらしさはやはり僕には失望に近い感情を与えたのに違いなかった。(傍点、引用者)

当時はまだ湘江に橋はかかっていない。「中の島」と日本人の間で呼ばれていた橘子州へも対岸へも渡し舟で行くしかなかった。その視線、視角も限られたものであっただろう。まして当時の中国支那によ

せる日本国民の平均的感情、教養からすれば上記のような感慨は無理からぬところではあった。「雑信一束」にはこうも書いている。

往来に死刑の行われる町、チフスやマラリアの流行する町、水の聞える町、夜になっても敷石の上にまだ暑さのいされる町、鶏さえ僕を脅すように「アクタガワサン！」と関をつくる町、……（六長沙）

暗い、灰色の町という印象で、民衆の活気、生活感情は微塵も描かれていない。特派員としての行脚はいわば御膳立てされた日程、旅程のコースであつた。日本人や通訳を通して得られた情報もまた一面的なものであつた。それは漱石の「満韓ところどころ」の取材旅行と基本的枠組みとしては変わらない。だが、芥川は彼なりの視線で民衆を見据えているところは少なくない。この年の七月毛沢東は中国共産党の創立に参加しているのだが、そのことの言及は芥川の著作にはない。時代は風雲急を告げていたが、芥川は悠然とした旅を続けていた。ところで、青年毛沢東が橘子洲頭で「沁園春」を詠んだのは一九二五年の秋であつた。いま、その一部を思い起こそう。

独立寒秋

ひとり寒き秋に立てば

湘江北去

湘江北に流る

橘子洲頭

橘子洲頭

看 萬山紅遍

みよ 万山紅葉あまねくを

層林尽染

かさなれる林ことごとく染まりたり

漫江碧透

見晴かす江青く透きとおり

百船争流

おびただしき船流れにあらがう

鷹擊长空

鷹はるけき空をうち（竹内実訳）

……

『湖南の扇』の中段に「僕は翌々十八日の午後、折角の譚の勧めに従い、湘江を隔てた嶽麓へ麓山寺や愛晚亭を見物に出かけた」とあるのを見ると、船で現在の牌樓路の河岸に上陸し、岳麓を指摘したものと思われる。また、次のような一節がある。

譚は何か思い出したように少時口を噤んだまま、薄笑いばかり浮かべていた。が、やがて巻煙草を投げると、真面目にこう言う相談をしかけた。「嶽麓には湘南工業学校と言う学校も一つあるんだがね、そいつをまっ先に参観しようじゃないか」

「うん、見ても差し支えない」

僕は煮え切らない返事をした。それはついきのうの朝、或女学校を参観に出かけ、存外烈しい排日的空氣に不快を感じていたためだった。しかし僕らを乗せたボートは僕の気もちなどには頓着せず、「中の島」の鼻を大まわりに相変わらず晴れやかな水の上をまっ直ぐに嶽麓へ近づいて行った。……

湘南工業学校とは湖南大学の前身のことであろうが、朱漢民著『岳麓書院の歴史と伝統』（湖南大学出版社一九九六、六一頁）によれば、湖南公立工業専門学校が正式名である。いずれにしても芥川が実際にここを参観し、講演したという史実を不幸にして私は知らない。それよりも気を引かれるのは「排日的氣運」である。「支那游記」に収められた「雜信一束」にその記載がある。

長沙の天心第一女子師範学校に附属高等小学校を参観。古今に稀なる仏頂面をした年少の教師に案内して貰う。女学生は皆排日の為鉛筆や何かを使わないから、机の上に筆硯を具え、幾何や代数をやっている始末だ。次手に寄宿舎も一見したいと思ひ、通訳の少年に掛け合つて貰うと、教師愈々仏頂面をして曰、「それはお断り申します。先達もこの寄宿舎へは兵卒が五六人闖入し、強姦事件を惹き起こした後ですから！」（七学校）

おそらく譚はこの天心第一女子師範学校の一件を知っており、芥川に再度排日の洗礼を受けさせようと画策したのであらう。当時、湖南大学は排日運動の中核的存在であつた。こうした経緯から芥川は「素通り」した可能性が極めて高いと考えられる。

ここ数年、芥川龍之介の作家的地位をめぐる再評価が行われている。なかでも芥川の中國觀、アジア認識は再考の対象として関心を惹かれる。



長沙市街の黄興広場にて

八、ある歴史家との面談

夜、賓館に日本語学科の教員が私を訪ねてこられた。日本語学科の熊沛彪教授であった。私は『常德師範学院』『湖南文理学院』の紀要に掲載された細菌戦の新しい研究情報を得ようと思ったのだが、熊教授は本学図書館ではなく、省の図書館かもしれないと返答であった。唯一、いただいたのは『湖南大学学报』十七号に掲載された陳先初氏の論文「一九四一年日軍対湖南常德細菌戦」の復印であった。それでもすでに入手していた陳致遠氏の「日軍常德細菌戦致死城区居民人数的研究」（『民国档案』二〇〇六）と合わせて常德における細菌戦の実態を知る重要な資料となる。なお、常德には最近、「七三一研究所」が設立されたことも記しておこう。常德は日本人が想像を越えた惨禍の大地であることを記憶にとどめておきたい。その実態は同じく陳先初著『人道之転覆——日軍侵湘暴行研究』（社会科学文献出版社、二〇〇四）に詳しい。「今回、滞在日程の関係で常德、桃花源を再訪することは叶わなかったが、次回はさらに湘西の鳳凰城まで足を伸ばしてみたい。」



蔡鏢之墓（岳麓山にて）

湖南常德における日本軍の細菌攻撃は日本では松村高夫氏の「湖南常德細菌戦一九四一年」（同他『戦争と疫病』本の友社一九九七）などによつて実態が知られているが、被害者の総体はまだ把握されていない模様である。つい先日南京師範大学の張連紅教授とも議論した点であったが、今後新たな史料の発掘、証言によつてその全貌が明らかにされるであろう。熊教授は『近現代日本覇権主義』という著書を持ち、日中関係史に関心を寄せる私に自らの学説を開陳すべく訪ねて来られた。いったい、覇権主義とは何か。今、中国も日本の互いの覇権主義の解釈に混迷を極めている。熊教授は覇権主義の発生を日清戦争以後とするのではなく、事実上は三十年代からはまったことを縷々説明した。また、覇権の意味は実是不透明で一種の政策展開のための策術的な性格をもつ点などを語ったのであるが、私自身十分な知識も無く、断片的な応酬に終わったのは心残りであった。彼は湖南大学の亜細亜太平洋研究所所長、中国日本史学会常務理事の役職でもある。今後、いろいろとご教示を仰ぐことを約した。南京では張連紅教授に、そして湖南では熊沛彪教授という歴史学者にお会いしたことになるが、日中戦争期における日本軍の戦争犯罪に関心をもつことが私自身、中国を理解する一つの手法と思っている。それもただ歴史的事実を検証するのではなく、被害の現実と記憶を言語によつてどう記述され、継承されるのか、に関心を寄せずにはいられない。

九 岳陽への旅

二十二年前に訪れたのは春の季節だった。当時は道も整備されておらず、山道を越え、まるでキャラバン隊のようにして一泊二日の旅程でめぐったものである。それが今では高速道路（京珠高速）で二時間半で着くことができる。当然、日帰りも可能になり、長沙からは観光ツアーも毎日のように出ている。

洞庭湖は水量が寂しげであった。だが、一九九六年、九九年には水位が十メートルほど上がったという。先ごろの洪水では洞庭湖よりも南の衡州一帯が甚大な被害を蒙ったらしい。湖水は濁り、行き交う船は浚渫船が大半で、昔のような情緒はない。

『岳陽楼古今書画精選』（方物華編著）は歴代の岳陽楼とともに訪れた文人の書き残した書画を集めたものである。なかでも「岳陽楼記」の書法は宋代から清代まで変遷し、書家に関心をもつ者にとつては貴重な文献となっている。その「岳陽楼記」の最終節。

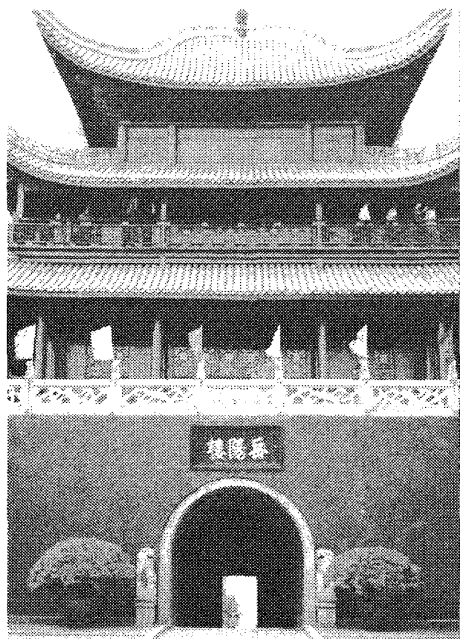
先天下之憂而憂、後天下之樂時樂。

今の日本の政治家にこの呟きを煎じて飲ませたい心境に駆られる。学生の王さんはこの全文は小学生のとき暗唱させられました、と言う。正直いつて頭の下がる思いだ。その意味をどれだけ理解できたかは別として、暗唱するまで反復するという文化の密度に私は言葉もなかったのである。

旅を終えて

夢のような八日間の長沙滞在であった。旧知の友人とも再会し、かつてここで暮らした歲月の大切さを身に沁みて感じた時間であった。湖南は文字通り、私にとって第二の故郷である。これからもこの友誼を大切にしていきたい。南京、そして湖南の旅はあらためて中国の文化の壮大さ、悠久なる歴史を彷彿させてくれた。また、先々で民衆の生の生活に触れ、私の中国認識をまた修正させた。何よりも、まるで家族のように歓迎してくださった関係者の配慮には万感、胸に迫るものがあつた。東南大学でも湖南大学でもさまざまな友誼が交わされた。民間の交流がいかに大切であるかを痛感した二週間の旅であった。

しばらく中国東北を探訪して南方に足を向けると、そこに言葉では表現しにくい感情の対比がある。それは東北部が十五年に亘る「淪陥」の歴史を生きてきたからであろうが、南方においても数多い日中戦争の戦争の爪痕を残している。その南方を旅して、開放的



岳陽楼にて

な感受性を意識したのはなぜだろう。この心理的アンビバレンツこそまた、今後の私自身の課題となるものである。

東南大学の徐教授の言葉が胸に残っている。今の若い世代はスタートラインについたときからゴールを意識している。その過程にどんな困難があるかを考えようとする。だが、それは何も日中の若者だけの話ではない。日中間に横たわる問題を考えるときも同じことが言えるのではない。また徐教授は世界記録保持者の劉翔の言葉を紹介した。彼は敢えて難しい種目に挑戦し、世界記録を樹立したこと。苦労は大きければ大きいほどその達成感は大いいものであると。言うまでも無いことが、異言語で語り合えばこそまた別の実在感が生まれてくる。それが異文化、異言語による交流の意義なのだろう。

今回の旅にあたり、南京では東南大学、湖南・長沙では湖南大学の関係者に多大なるお世話をいただいた。記してお礼申し上げる。なお、著者のよる「南京、湖南・常德の記憶——最近の旧日本軍細菌戦研究からの断想」（敬蘭之さんを偲ぶ会配布資料二〇〇六）もあわせて参照いただければありがたい。



恩師、周炎輝先生ご夫妻と（前列左から二人）

【参考文献】

- 芥川龍之介『大導師信輔の半生・手巾・湖南の扇』岩波文庫一九九〇
芥川龍之介『上海游記・江遊游記』講談社文芸文庫二〇〇一
芦谷信和他編『作家のアジア体験——近代日本文学の陰画』世界思想社一九九二
関口安義『芥川龍之介の歴史認識』新日本出版社二〇〇四
関口安義『よみがえる芥川龍之介』NHKライブラリー二〇〇六
川西政明『わが幻の国』講談社一九九六
竹内実、武田泰淳『毛沢東その詩と人生』一九六五

（二〇〇六年九月二十五日受理）